東風夜雨　　中国

むかし、たいそう貧乏な男とおかみさんがいました。男は毎日、野原で草を刈って町へ持って行き、ひえとかあわとか、わずかな食べ物に換えて帰るのでした。一日にやっと二度の食事しかできませんでした。

あるとき、おかみさんがいいました。

「いつか、一個でいいから肉まんじゅうを食べることができたら、死んでもいいわ」

男は、

「かんたんなことさ。二日の間、何も食べなければいいんだ。一日目の草刈りの金で豚肉を買って、二日目の草刈りの金で粉を買うんだ」といいました。

「まああ、そうしましょ。二日くらいお腹をすかせてもかまわない」

ふたりは、二日のあいだ何も食べないでいました。そして、二日目の夜になると、わずかな豚肉と粉を前にして、肉まんじゅうはあした作ろうといって、寝ました。

あくる朝、男は、お腹をすかせてふらふらしながら草刈りに出かけました。おかみさんもふらふらしながら、豚肉をきざみ、まんじゅうにしてなべに並べて焼きました。おかみさんは、なべにふたをすると、家の外に出て、男が帰ってくるのを待っていました。

やがて、男が草をかついで、よたよたと歩いて来ました。おかみさんは、急いで台所に行ってお皿を並べました。ところが、なべのふたを取ってみると、肉まんじゅうがありません。ぼうぜんとしてなべの中をのぞきこみました。そこへ、男が、肉まんじゅうをめがけて転がりこんできました。

「おまえ、何をぼんやりしてるんだ。さっさと肉まんじゅうを食べさせてくれ」

「肉まんじゅうは、消えちゃったよ」

「なんだと。ひとりでみんな食べてしまったのか」

「ちがうよ。ほんとに消えちゃったんだよ」

「うそつけ」

男は、おかみさんになぐりかかりましたが、お腹がすいて手にも足にも力が入りませんでした。

ふたりは、しかたなく、となりの家からトウモロコシの粉を借りてきて、おかゆを作って食べました。ひと息つくと、おかみさんはいいました。

「わたし、ほんとうに肉まんじゅうは食べなかったんだよ。このおかゆがなかったら、飢え死にするところだった」
何日かたちました。ふたりはやっぱり肉まんじゅうが食べたくてなりません。
「なあ、粉は借りることにして、豚肉の分だけ一日がまんして、肉まんじゅうを食べよう」
「そうね、一日がまんするだけなら。たとえ飢え死にしたって食べたいわ」
豚肉と粉が用意できると、ふたりは、また、肉まんじゅうはあした作ることにして寝ました。
あくる朝、男は、ふらふらしながら草刈りに出かけました。おかみさんもふらふらしながら、豚肉をきざみ、まんじゅうにしてなべに並べて焼きました。おかみさんは、こんどは、家の外に出ないで、なべのそばに腰かけて、じっとなべのふたをにらんでいました。
しばらくすると、家の前でだれかが話している声がしました。
「このうちでは、また肉まんじゅうを食うつもりだぞ。そんな福もないくせに。もういちど、肉まんじゅうをかくしてやろうや」
おかみさんは、これを聞くなり、あわてて両手でなべのふたをおさえて、外を見ました。すると、青い服を着たじいさんと、白い服を着たじいさんがしゃべっていました。おかみさんは、思わずどなりました。
「あれまあ、前に肉まんじゅうが消えうせたのは、おまえさんたちだったんだね。うちが肉まんじゅうを食べるのが、どうしていけないんだい」
ふたりのじいさんはいいました。
「おまえの家は貧乏の運命だ。肉まんじゅうが食える身分じゃない」
「どうしてそんなことが分かるんだい。仙人さまだとでもいうのかい」
すると、青い服を着たじいさんがいいました。
「わしは、福の神じゃ」
白い服のじいさんはいいました。
「わしは、貧乏神じゃ」
おかみさんは走って行って、青い服のじいさんの手をしっかりとにぎりしめていいました。

「どうか、うちにも金運をさずけてくださいまし」
「いやいや、おまえがどんなにたのもうとも、わしらには、金運をさずけることはできないのじゃ」
そういって、ふたりのじいさんは行ってしまおうとしました。おかみさんは、じいさんの手をぎっちりにぎりしめて、ふりはらっても放しません。じいさんたちは、こまりはてて、いいました。
「わしらには無理だから、金神さまにたのみなさい。黄色い上着を着て黒いろばに乗った男が、毎日この家の前を通りすぎるのを覚えていないかな。あれが、金神さまだ」
おかみさんは、そういえば、毎日家の前を黄色い上着の男が黒いろばに乗って通るのを思い出しました。
「ほんとにあの人が金神さまなんだね。もし違っていたら、こんどあんたたちに会ったとき、あたし、死にものぐるいにつかまえて放さないからね」
「待っていなされ。金神さまは、まもなくお通りになるから」
おかみさんが手を放すと、じいさんたちは、あわてて行ってしまいました。
まもなく、金神さまがやって来ました。おかみさんは、飛び出して行って、ろばを止めていいました。
「金神さま、金神さま。あたしどもに、金もうけの運をおさずけくださいまし」
金神さまは、
「なんだって。なんでわしを金神さまなどとよぶのじゃ」とききました。
「さっき、福の神さまと貧乏神さまが教えてくれました。知らん顔をなさらないでくださいな」
金神さまは、ため息をついていいました。
「そなたの家は、貧乏運じゃ。わしには金もうけの運をさずけることはできん」
おかみさんは、金神さまの手をつかんで、
「さずけてくださらないんなら、あたし、あなたを行かせませんからね」といいました。
いくらふりはらっても放してくれないので、金神さまは、あきらめていいました。
「そなたの家では、せいぜい人の金を借りて利益を得るくらいのことだ。あの東のほこらの裏に、甕三つ分の銀子が埋まっている。それは、東風夜雨のものだが、あれを掘り出して使ってよろしい。ただし、いつかお金ができたときには、かならず返さねばなら

んぞ」

おかみさんは、ひざまずいて、何度も何度もお礼をいいました。

金神さまが行ってしばらくすると、男が草をかついで帰って来ました。男は、台所に転がりこんでなべのふたを取り、肉まんじゅうにかぶりつきました。おかみさんは、にこにこしながら、

「そんなに、がつがつしなくてもいいのよ。これからは、肉まんじゅうだってなんだって、いくらでも食べられるんだから」といいました。そして、福の神と貧乏神が肉まんじゅうを食べてしまったこと、金神さまがお金を約束(やくそく)してくださったことを話しました。

ふたりは、お腹いっぱい食べると、すきを持って東のほこらに行き、裏の地面を掘りました。すると、真っ白い銀子のつまった甕が三つ出て来ました。

三年もたたないうちに、男の家はお金持ちになりました。

「あたしたち、東風夜雨さんにお金を返すときがやってきたわ」

「そうだな。おれが自分で返しに行くか、それともだれかにたのんで返して来てもらうか」

「やっぱり、あんたが返しに行ったほうがいいよ」

男は、ひと甕分の銀子をふくろにつめてろばに背負わせると、東風夜雨を探(さが)しに出かけました。

ある村に入ると、男は、村の人に、

「この村に東風夜雨さんはいませんか」とたずねました。

「そんなけったいな名前、聞いたことがないねえ」と、村の人は答えました。

男はまた歩いて行きました。たくさんの村を通りましたが、村の人はみな、東風夜雨なんてきみょうな名前は聞いたことがないといいました。やがて、広い荒(あ)れ野にさしかかりました。日は暮(く)れかかり、空には黒雲がわき起こって今にも雨が降(ふ)りそうです。ふと向こうを見ると、小さなかやぶき小屋がありました。行ってみると、そこには、おばあさんと、お嫁(よめ)さんがふたりだけで住んでいました。

男が、

「日も暮れましたので、ひと晩泊(ばんと)めていただけないでしょうか」とたのむと、おばあさんが、

「こんなせまいところに、どうしてお泊めできましょう」といいました。

「雨が降りそうなので、軒下でもよいから泊めてください。」
「それでよろしければ、お泊りなさい」
男は、ろばを家の前の木につなぐと、軒下で横になりました。東風がひとしきりふいて、雨が降って来ました。
男は、ゆめうつつに、赤ん坊の産声を聞きました。そして、おばあさんが、
「ほれ、男の子だよ」というのが聞こえました。お嫁さんが、
「なんという名前にしましょう」といっています。
「そうだねえ。外は東風がふいているし、夜の雨も降っているから、東風夜雨と名づけましょう」
あくる朝早く、雨はやみました。男はすぐに起き出して、おばあさんにいいました。
「おばあさん、お孫さんができておめでとう」
おばあさんは、ため息をついて、
「でもねえ、息子は遠い土地へ土掘りにやとわれて行って帰って来ないし、うちにはコショウや飴さえ嫁に買って食べさせるお金がないんですよ」といいました。男は、
「お孫さんは、なんというお名前ですか」と聞きました。おばあさんはいいました。
「東風夜雨ですよ。あの子が生まれたとき、外では東風がふき夜の雨が降っていたからね、わたしがいいかげんにつけたんですよ」
男は、
「おばあさん、おめでとう。これからは金持ちになりますよ。東風夜雨さんには、甕三個分の銀子があって、わしのうちにあります。今ろばに積んでいるのは、甕ひとつ分です。東風夜雨さんに送り届けに来たんです」といいました。
おばあさんと、お嫁さんは、飛びあがってよろこびました。
男は、一回また一回と、甕三個分の銀子をすべて東風夜雨のところに運んだということです。

—江蘇省灌雲

村上郁再話

資料『中国の昔話』澤田瑞穂訳／三弥井書店